20024

DCA 術前冠動脈 CTA の cross section 画像が有用であると考えられた一例

Directional Coronary Atherectomy(DCA)を施行するにあたり、プラーク性状や分布は非常に重要な情報であり、DCA を施行するかどうか自体にも影響を与える。DCA 施行時には IVUS 等の血管内イメージングデバイスを用いてプラークの位置を同定し、DCA デバイスの径や削る位置、長さを決定する。これらの必要な情報を、侵襲の少ない術前冠動脈 CTA から得られることができれば、治療のストラテジーやプランニングを事前に詳細に検討し、手技も安全に施行することができると考え、今回我々が経験した症例において術中 IVUS と対比して検討した。 症例は 56 歳男性、冠動脈 CTA にて#6 に非石灰化プラークによる 75%狭窄病変が疑われ、CAG を施行することとなった。CAG において CT 同様#6 に 75%狭窄病変を認めたため DCA を考慮した PCI へ移行し、プラーク性状や分布の情報を得るため IVUS を施行した。IVUS では対角枝と中隔枝が同レベルで分岐、プラークの分布は#6 に限局しており、左主幹部および対角枝、中隔枝には分布していなかった。 術前冠動脈 CTA の cross section 画像においても同様の所見を得ることができたため、DCA を用いた PCI を安全かつ迅速に施行するうえで有用であると考えられた。